

## 第85回麻布獣医学会 一般演題11

## シェットランド・シープドッグにみられた 胆嚢梗塞の一例

加藤 崇<sup>1</sup>, 湯藤 なつき<sup>2</sup>, 茅沼 秀樹<sup>3</sup>, 斑目 広郎<sup>2</sup>, 土屋 亮<sup>1</sup>

<sup>1</sup>麻布大学内科学第二研究室, <sup>2</sup>麻布大学附属動物病院, <sup>3</sup>麻布大学放射線学研究室

### 【はじめに】

犬の胆嚢梗塞は、2004年にHoltらによって提唱された、胆嚢壁の全層性凝固壊死を病理組織学的な特徴とする疾患単位で、罹患した胆嚢壁内の動脈に線維素血栓が認められることもあるが、その原因は不明とされている。

### 【症 例】

症例は13歳齢、避妊雌のシェットランドシープドッグで、約5年前に副腎皮質機能亢進症と診断され、本学大学病院にて治療を継続していたが、2週間前より甲状腺機能低下症を併発した。レボチロキシンによる治療を開始から数日後、嘔吐、元気消失、食欲減退などの症状がみられた。再診時の血液検査ではWBC:27,150/ $\mu$ l, TP:5.2g/dl, Alb:2.2g/dl, ALT:72IU/L, ALP:6834IU/L, T-Bil:0.75mg/dl, Glu:68mg/dlであった。腹部X線検査では肝臓の腫大、胆嚢周囲の不透過性亢進がみられた。腹部超音波検査では胆嚢と総胆管が高度に拡張し、胆嚢内は放射状の高エコー陰影を示す粘液嚢腫の所見が認められた。胆嚢壁の肥厚は認められなかった。また、肝臓実質には瀰漫性に高エコー結節が認められた。以上の所見から胆汁排泄障害に伴う肝障害が考えられたため、胆嚢全摘出と肝切除生検を実施した。術中所見で大網の一部が胆嚢に癒着し、胆嚢周囲の炎症を認めるとともに強い異臭を示したことから、胆嚢壁の一部が破綻していたことが疑われたが黄色調の腹水は認めなかった。拡張した胆嚢壁は脆弱で周囲の

肝臓に癒着しており、内腔には多量の粘稠性内容物を含んでいた。肝臓には瀰漫性に白色結節が存在し、断面は黄色調を呈していた。術後、嘔吐は止まらず、黄色の腹水(Bil:13.1mg/dl)出現などから胆汁性腹水による腹膜炎が疑われたため、二度にわたって再手術を実施したが胆汁漏出部が確認できず、初回の手術から7日後に斃死した。剖検は実施できなかったが、手術時に採取された胆嚢と肝組織について病理組織学検査を実施した結果、胆嚢壁は全周性に全層性凝固壊死が認められ、胆嚢動脈と胆嚢壁内の動脈には線維素血栓が散見されたため、胆嚢梗塞と診断された。

### 【考 察】

今回の症例では特徴的な臨床像が壊死性胆嚢炎のような他の胆嚢原発疾患と類似するため、胆嚢梗塞の術前診断は困難であると考えられた。犬の胆嚢梗塞は一般的に致死率の高い疾患(33%)とされている。特に本症例の場合、胆嚢壁のみならず周囲の肝臓実質まで壊死していたため、胆嚢全摘出と内科療法による保存治療は奏功しないと考えられた。犬の胆嚢梗塞は1993年から2003年の間にペンシルバニア大学で認められた12例の報告があるのみで、その発生頻度は不明である。尚、本症例においても血栓は本病変の原因なのか、あるいは胆汁の漏出と腹膜炎による局所傷害に続発したのかを組織学的に明確にすることはできず、原因は不明である。